

## 雑草通信

船津好明 1936年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

### 芸と美意識

芸とは何かというと、短い言葉では説明しにくい。芸は、修練を積んで得た技と言われるが、これは工夫を凝らす、研究を重ねる、などの経験や知識の蓄積による技ということもできよう。人の言動の中には、芸と芸でないものが混在するが、その境界線を引くことは難しい。

芸は個人で持つことができるし、複数の人でも持つことができる。複数の人が連携して団体を作り、目的に向かって修練を重ねて得た技は、その団体の芸となる。各団員の芸の結集と言える。

芸の意味を上のように、修練、研究などという言葉で説明すると、芸は特別の人だけに備わるもののように思えるが、実はそうでない。人は皆、幼少期から学習によって知識を積んでいる。成長しても意識せずに生活の中で修練を積んでいる。人に得手・不得手があり、得意・不得意があるのは、芸を意識しなくても芸の一角の表れなのである。「私は無芸だ」などと言う人にも芸は潜在している。したがって、芸は全ての人に身近なものである。芸を意識する、しないに係わらず、芸は日々の生活の中にある。

過去の人々も芸を持っていた。太古の人でも、狩に上手・下手があったであろう。狩の名手の技は芸に当たる。

芸は職業にすることができる。売買できる。職業とせず、趣味に留めることもできる。職業でも趣味でも芸は芸、違いは売り物にするか、しないかである。

芸という言葉ですぐ頭に浮かぶのは演芸で、歌や劇などだが、実は非常に広く、芸は人間のあらゆる言動について言える。芸という字を含む言葉はたくさんある。芸人、芸者、芸妓、芸子、芸術、芸能、芸事、職人芸、園芸、手芸、工芸、陶芸、学芸、文芸、話芸、曲芸、遊芸、大道芸、隠し芸、多芸、無芸などと多い。道(どう)という言葉もある。道は芸より厳かに聞こえる。茶道、書道、芸道、柔道、武道、剣道、相撲道などがある。技(ぎ、わざ)という言葉も芸に通じる。術(じゆつ、すべ)も芸に通じる。技術、技巧、演技、競技、軽技、得意技、余技などの言葉がある。芸術と言うと高尚に聞こえる。奥(おく、おう)という言葉は芸の深みを思わせる。極意、秘訣も奥に並ぶ意味合いを感じる。こつ(骨)は物事を思い通りに運ぶ要領で、芸に関係する。何事もこつを心得ているとうまくいく。このように、芸に関係する言葉はたくさんあって、少しずつ語感が違うように思うが、それらの異同を明示するのは難しい。そのため語意が類似した言葉をまとめて「芸」と言うことにする。芸には芸能一般は言うまでもなく、多くの運動競技、囲碁、将棋などの頭脳競技、美術、音楽、文芸、建築など挙げ尽くせない。

芸には浅深がある。浅深と巧拙は違う。巧拙は主観性が濃い。浅いのは未熟を意味する。深いのは成熟を意味するが、深みに底はない。芸の深まりは丁度、穴に潜って進むようなもので、穴の入口をくぐれば入門、穴を奥に進むほど芸は深まっていく。行き止まりはない。

修練を積むと芸が深まっていく。多くは目標が定まっている。しかし、何かの事情で目標が変わることもある。同じ流儀の舞踊を一筋に、芸を極めたい人もいる。ある芸に係わっているうちに、別の芸に転向することもある。浪曲師が歌謡歌手に転身するなど、職業人の場合は世間に知られる。別の芸への

転向は、以前の芸の蓄積があってこそできるもので、芸は姿を変えて以前から続いていると考える。一般人の芸は必ずしも世間に知られないが、一芸を貫く人もあり、転向を重ねて違った芸を渡り歩く人もいて、この点は一般人も職業人も変わらない。

ある芸を持ちながら別の芸を始めることもある。一人で複数の芸を持つことも珍しい事ではない。浅い芸を多く持つのは、深い芸を一つ持つことに匹敵することもある。カラオケで歌う自分の声に惚れながら、絵を描いたり、家具の頑固な汚れを落とすことを特技にしたり、俳句を詠んだり、と多芸の人もいる。

芸が深まると、凡人には分からない小さな違いが、大きな違いに思えてくる。越えるべき壁が厚く、越えようとまた更に厚い壁が立ち上がる。芸は壁を超えながら上達していく。

芸は美意識を伴う。芸の浅深は美しさの程度に関係する。美しさの程度は目盛りで測れるものではない。芸の深さに底はない。芸の美しさには上限はない。上には上がある。ただし、美意識は主観的なものであり、絵画などの場合のように、ある人には美であっても、別の人には美でないかも知れない。

芸の美しさは芸の評価につながる。職業の芸は芸人（売り手）と鑑賞者（買い手）の双方によって評価される。芸の評価は芸人の人気の測定にもなる。そして芸人は、より美しい芸を目指して一層の磨きをかける。私的な芸の場合、評価は自から行う。

芸とは修練を積んで得た技と言うが、技は善にも悪にも使われる。芸は普通は善い事に使われるが、悪事に使われることもある。即ち芸は、使い方によって善行（ぜんこう）にも悪行（あくぎょう）にもなる。芸が悪行に使われた場合、悪いのは行いであって、芸自体が悪いのではない。

悪には法で定めた悪と道義的な悪がある。法に触れる悪事を実行すると罰せられる。その悪行が、修練を積んで得た技によっていけば、即ち芸が用いられていけば、芸がいかにも美しくても罰せられる。

芸が犯罪に使われるのは残念なことである。現在、知能的な犯罪が世界に頻発している。通信技術を巧みに悪用した犯罪は重大な社会問題になっている。

コンアーチスト（con-artist）という言葉がある。con は confidence の略で信頼、信用を意味し、artist は芸術家である。信頼の芸術家という。信頼を創り出す芸術家である。信頼できないものを信頼させる芸人、騙しの名人、天才詐欺師と言ってもよい。その手口は、被害者も舌を巻くほど巧妙で、芸術に値するという。その芸術を被害者が美しいと思うかどうかは別として、芸の主は実行して成功すれば、手口を自讃し快感に浸るであろう。第三者も手口に美意識を覚えるからこそ、コンアーチストと呼ぶのである。詐欺が成功するためには、詐欺師は秀才でなければならない。優れた頭脳が善行に使われれば良いものを、とつくづく思う。

芸の源泉は何か。知恵か。ある芸の道に知恵が湧くと、その道の芸が進む。芸はまた知恵を呼び、知恵がまた芸を深める。これが繰り返される。芸の道には歩き易さ、歩きにくさがある。人には天性があり、天性に合った道は歩き易い。得意・不得意が自然に身に付く。人は成長の過程で、あるいは成人となった後に自分の歩むべき道を選ぶ。経験や訓練の結果、歩きにくかった道が歩き易くなることもある。眠っていた天性が目覚めることもある。そうして得た道には知恵が湧く。歩いているうちに脇道を見つけ、そこに魅力を感じて入り込み、戻らないこともある。脇道に更に脇道があり、入って戻らないことを繰り返すと、個々の芸は浅くても、芸歴が多彩になる。

私の芸は、本当に芸と言えるかどうか分からないが、これまで浅いまま転々と替わった。浮気ばかりしたが、どれもある程度の美しさを感じたし、不思議な思いでいる。

-----

既刊（抄） 第10号 米を巡る思い、 第11号 天動説と地動説と宇宙原理